

車排ガス処理触媒の金型

大垣精工が一貫生産

国内工場増強

精密金型製造の大垣精工（大垣市浅西、上田勝弘社長）は来年1月末までに、乗用車の排ガスなどを処理する触媒用金型を自社で一貫生産する体制を整備し、今後需要が見込める中国に営業拠点を開設する。今年1月からの増産計画を当初の2・5倍から3倍超とし、投資額も約3億円追加して約5億円となる。



大垣精工で生産している触媒用の金型や触媒＝大垣市浅西、大垣精工本社

の試作検査の機材も導入し、受注から最終テストまで行い納入する一貫生産体制となる。中国で大幅な需要増加が見込まれることから、江蘇省鎮江市に営

中国に営業拠点

触媒は、粘度のあるセラミックスを金型に押し出し、格子状の微細な穴をつくった筒状の製品。乗用車のほか、特殊車両や大型車両などに使われる。新興国での大気汚染やフォルクスワーゲン（VW）の排ガス規制逃れ問題で環境規制が強まり、今後も需要が伸びると予想される。

触媒用金型は、高度な加工ノウハウが必要で、約40年前からハニカム（蜂の巣）構造の

金型を製造している同社には、国内だけでなく中国や韓国からの引き合いが急増しているという。

計画では、本社と沖縄工場（沖縄県うるま市）に専用の加工機を10台増やして計13台とし、月産2500万円分から3倍強の同8000万円分への増産を目指す。また、これまで外注だった金型に施す表面硬化処置と、触媒を押し出す成形機で

業サービスセンターを現地生産される触媒用開設。現地採用の従業員2人程度が常駐し、日本から保守点検に出向く従業員の宿泊所としても活用する。上田社長は「中国で」と意気込む。